

ボランテティア精神の源を訪ねて……⑩(最終回)
琴陵宥常と御本宮造替

おかげさまで「歴史探訪シリーズ」の連載は10回を数えることとなりました。今回でもって完結致します。

記念すべき最終回は日本水難救済会の創設者・琴陵宥常と金刀比羅宮御本宮の造替についてです。



金刀比羅宮禰宜
琴陵 泰裕氏

◆若き別当◆

琴陵宥常ひろつねは天保11(1840)年、伊予国(愛媛県)宇和島で山下盛新の次男として誕生しました。山下家は金毘羅大権現別当(金毘羅大権現は金刀比羅宮の当時の呼称。混乱を避けるため以下「金刀比羅宮」で表記を統一。別当は宮司に相当)を代々輩出する家筋で、宥常の実家はその分家筋にあたります。当時の金刀比羅宮は神仏習合の社で、最高責任者である別当は社僧(しゃそう)と呼ばれる僧侶の姿をした神職でした。

社僧は神職ではありますが、僧侶でもあるので妻帯できません。したがって跡目は実子ではなく、一族の優秀な子弟から選ばれておりました。宥常は10歳(数え年、以下同じ)の時に、18代別当宥黙(ゆうもく)の後継者に選ばれます。そして安政4(1857)年10月22日に第19代別当に就任しました。宥常18歳の時です。

◆金刀比羅宮の神仏分離◆

宥常はこのまま順当に別当として生涯を過ごすはずでした。しかし時代は明治維新を迎え大きく変わろうとしていました。明治維新とは江戸幕府に対する倒幕運動から明治政府による天皇親政体制への転換、それに伴う一連の改革を指します。政治、経済、文化なども大きく様変わりしましたが、宗教においても大きな変化がありました。

特に神仏習合の慣習を禁止し、神道と仏教、神と仏、神社と寺院とははっきり区別させる「神仏判然令(神仏分離)」は金刀比羅宮のあり方を根本から変えてしまうものでした。これは金刀比羅宮などの神仏習合の社に対し、すみやかに仏教色を排し、純然たる神社に戻すよう、また、別当と呼ばれる社僧も、



琴陵宥常像

日本最初の洋画家といわれる高橋由一の油彩画。明治13年12月から翌年1月中旬まで琴平に滞在した高橋由一は、琴陵宥常の肖像を描いたという。しかし、長らくその所在は不明であった。本図は平成13年琴陵宮司邸から発見され、テレビや新聞に報道され注目を集めた。由一の肖像画は写真から描きおこしたものが多く、この絵は琴陵宥常を前に描いたので他の肖像画と異なり臨場感があり、生硬では無い。羽織の紐の質感描写は由一そのものである。

復飾(僧侶をやめ、俗人に戻る)し神職になるようにとの沙汰でした。金刀比羅宮は判明しますところ、平安時代の末より神仏習合の社として世に知られておりました。何百年も続いた伝統を自分の代で潰すのは忍びない…。宥常は金刀比羅宮が神仏習合の社としてなんとか存続できるよう政府に嘆願しました。しかし「一生に一度はこんびら参り」と人々から絶大な崇敬を集める金刀比羅宮を例外にすることは「神仏判然令」の徹底に欠くこととなります。当然、宥常の嘆願は却下されました。先祖代々のしきたりを守りたい…。でも、いたずらに政府の指示に反するのは金刀比羅宮のためにもならない…。当時の宥常はとても悩んでいたと思います。

しかしながら、宥常はまた金刀比羅宮を率いる者として、今後の発展のためにはどちらが最善なのかということも冷静に考えていました。宥常は自身が率先して神職となって模範を示し、金刀比羅宮を純然の神社とすべく改革をす

すめていくことにしました。宥常は一度決めた事はどんな事があろうとも最後までやり遂げる!という強い意志を持っておりました。後年、日本水難救済会創設に奔走する、行動力とリーダーシップはこの頃から伺えます。金刀比羅

宮の神式改革は宥常の尽力により驚くようなスピードで進みました。そして、その神式改革の白眉が、金刀比羅宮御本宮の造替でした。



「金毘羅祭礼図屏風」に描かれた御本宮

「金毘羅祭礼図屏風」は金毘羅大権現の大祭会式例大祭)当日の様子を描いた六曲一双の図屏風で、左隻には二王門(大門)から御本社(御本宮)に達するまでの山上の風景が、右隻には頭人行列や門前町など山下の有様が描かれている。各隻には、「清信筆」の署名と「岩佐(方印)」「清信(円印)」の押印があり、狩野休圓清信が金毘羅の依頼で元禄年間(1688～1703)に描いたものと伝えられている。御本宮(当時は「御本社」「金毘羅社」と呼ばれた)は向かって右の建物で、左側は観音堂(現:三穂津姫社)である。



現在の御本宮

◆ 明治の御本宮造替 ◆

以前、本シリーズにて「旭社」を紹介しましたが「旭社」はそもそも寺院の「金堂(こんどう)」に相当する建造物を神式に流用したものです。

いっぽう、御本宮といえますと明治以前は「御本社」あるいは「金毘羅社」と呼ばれ、極彩色の絢爛な社殿だったといわれています。この御本宮をより“純然な”神式のご社殿に造り替えることが、当宮神式改革の総仕上げになります。

昨年、皇室の祖神と仰がれる伊勢の神宮、そして当宮とも大変所縁の深い出雲大社がそれぞれ二十年に一度の、

六十年に一度のご遷宮をお仕えされたことは記憶に新しいことですが、当宮では三十三年を式年として御本宮の遷座祭をお仕えしております。直近では平成16年にお仕えされ、私も当時学生でしたが、奉仕させていただきました。今から10年前のことです。

三十三年を式年とする御本宮遷座の制度が定まったのもこの頃です。三十三年というのは明治以前、金毘羅大権現の秘仏(本地観音堂)の開帳が三十三年に一度行われていたことと深い関係がございます。これも以前、ご紹介致しましたが、金毘羅大権現の秘仏は観音堂(現：三穂津姫社)に祀られて

いる「観音菩薩」です。観音菩薩は人々を救うため三十三の化身となることから、三十三という数字は観音菩薩を祀る寺院には所縁があります。当宮の最後の秘仏開帳は弘化2(1845)年のことで、それからちょうど三十三年目にあたる明治11(1878)年に御本宮は遷座・造替され、現在の社殿となりました。これは“純然な”神社となった後も、三十三年に一度の式年遷座のたびに自身が別当を務めた神仏習合時代、金毘羅大権現の伝統に思いをいたしてほしい、との宥常の願いが込められているようにも思えます。

◆ 御本宮と常若 ◆

新しく生まれ変わった御本宮は檜皮葺の社殿で「大社関棟造(たいしゃせきむねづくり)」と呼ばれる当宮唯一独自の建築様式です。両側壁板、神殿、幣殿、拝殿には東京の蒔絵師(まきえし)山形屋治郎兵衛(やまがたやじろべえ)らによって桜樹木地(おうじゆきじ)蒔絵の壁画、天井画が施されています。琴陵宥常とともに神式改革にあたった禰宜の松岡調(まつおかみつぎ)は当時の御本宮を指して「この世のものとは思えな

い」と述べております。(『年々日記』)

尚、天井木地蒔絵は経年劣化により原型を留めないほど傷んでおりましたが、平成16年の「平成の大遷座祭」にあわせ、重要無形文化財保持者(人間国宝)の室瀬和美先生、山下義人先生らのご協力により復元されました。

神道には「常若(とこわか)」という思想がございます。これは「常に若々しく清新な気持ちを保つ」という考えで、屋根を葺き替え、新しく生まれ変わった御社殿に神様をお迎えし、神様のお力

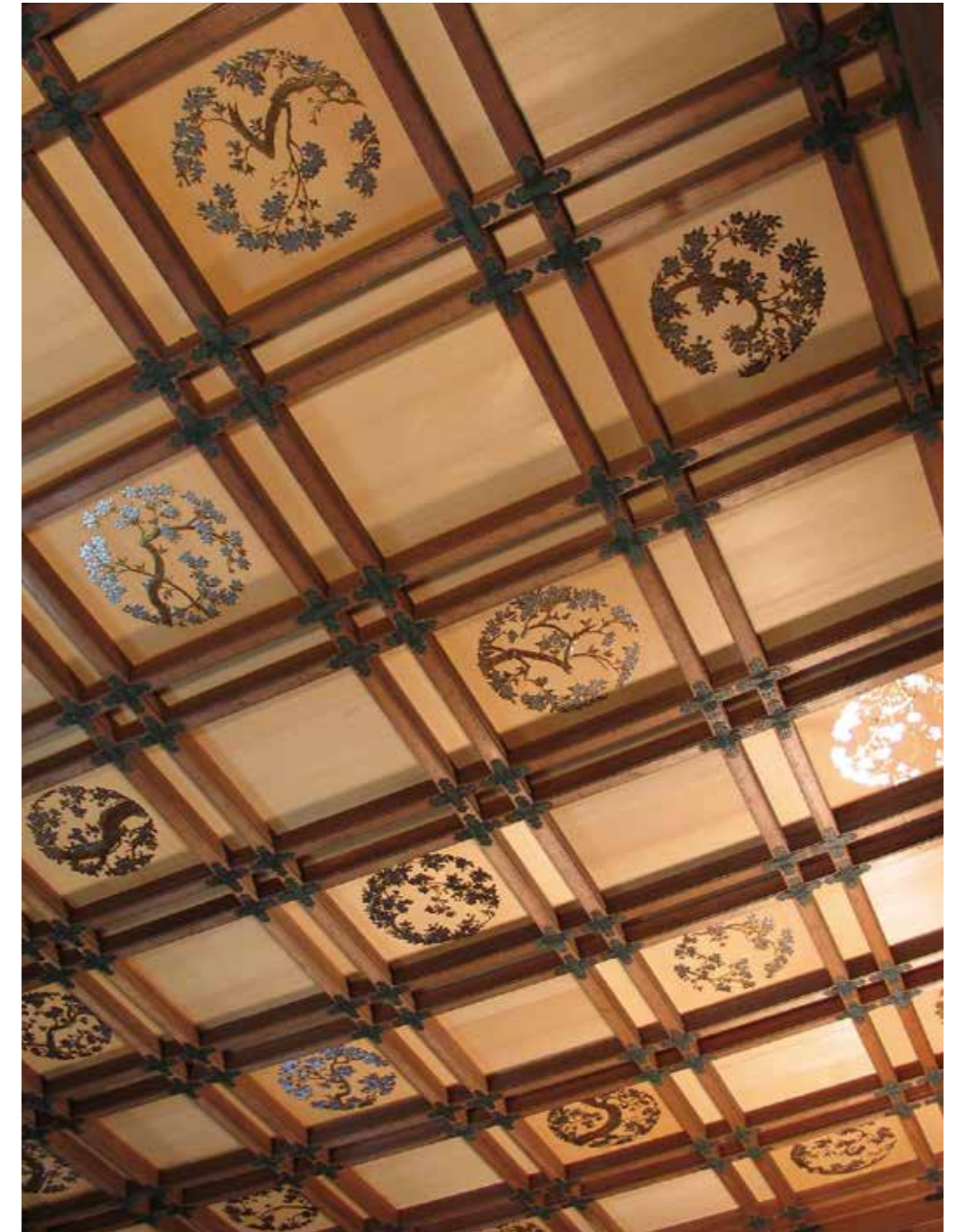
を高めるという遷座の発想はここからきております。

私も平成21年にありがたいご縁を頂戴し、香川県の水難救済会の会長に就任しました。今年でちょうど就任5年目になります。節目の年にあたりこれからも「常若」の精神でもって皆様とともに宥常の水難救済の精神を広めていきたいと思っております。

御精読ありがとうございます。



壁板の桜樹木地蒔絵(復元前)



天井の桜樹木地蒔絵(復元後)